若き光

題字：第５６代
高麗大記

令和５年２月２３日
発行：高麗神社々務所

「日高市商工会の活動」

日高市商工会
会長　猪俣利雄

令和三年十一月十一日（木）に有楽町の東京国際フォーラムにて、第六十一回商工会全国大会が開催され、そこで日高市商工会は、全国一、六四九 商工会から申請された各団体自慢の優良事業の中から選び抜かれ、見事二一世紀商工会グランプリ「商工会持続可能モデル賞」を獲得するという栄誉を受けました。本会は、平成七年に新商工会館移転計画が頓挫したことで、二億円もの借金を抱え、財政破綻の危機に陥っていたが会員増強と会費、手数料の見直しに取り組み改革を断行しました。平成二十五年に完済後、十年先の財政健全化を目的に、商工共済推進を開始し、毎日の活動を記録した「活動日報」による指導・管理体制の構築を図り、役職員一丸となって推進に取り組みました。その結果、会員数は二十年連続純増、商工共済は、累計二、〇〇一口の加入を達成し、商工会の自己財源増加に大きく寄与致しました。また、自己財源の増加に伴い、会員向け新規事業を積極的に展開出来るようになり、若手経営塾ネクスト・女性限定経営塾レディやＢＣＰ事業、高麗郡建郡一三〇〇のＰＲとして駅前イルミネーション事業、全国で唯一商工会が主催としてコロナワクチン接種事業など実施、地域を支える商工会として、その役割を存分に発揮していることが受賞の対象となりました。

第６１回　商工会全国大会

昨年も「商工会チャンネル事業」で商工会の業務・事業や会員事業所の紹介などを飯能・日高テレビの協力により二回放映致しました。今後も飯能・日高テレビや文化新聞、ＹｏｕＴｕｂｅなどで商工会の活動や多くの会員企業を紹介してまいりたいと考えております。

本会は「会員あっての商工会」を念頭に置き、一層信頼される組織を目指して機能強化に取り組むとともに、職員一丸となって困難を乗り越え、アフターコロナの経済回復に向けて成長できるように中小企業・小規模事業者支援に全力を挙げていきたいと考えております。

高麗川駅前イルミネーション事業

社宝見聞録

権現様の御朱印
―徳川家康の寄進状―

ここで紹介する御朱印（ごしゅいん）は、戦国大名や江戸時代の将軍が、花押（かおう）の代わりに朱色の印鑑を押して発行した朱印状のことです。

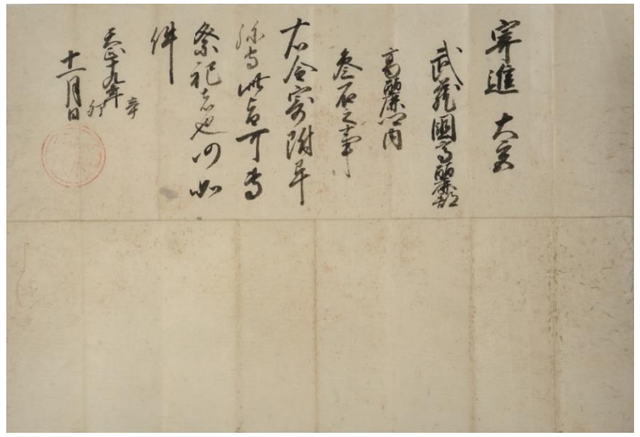


写真１　天正 19 年　徳川家康社領寄進状

天正一八年（一五九〇）に関東の領主となった徳川家康は、翌一九年に主要な社寺に領地を寄進する朱印状を与えました。

高麗神社に伝わる朱印状（写真１）もその時のものです。料紙を横半分に折った形の折紙（おりがみ）の文書で、大宮（高麗神社の古称）に三石の領地を寄進する内容です。

文書の末尾が「仍如件」、押印の位置が日付の下など、家光以降の将軍の朱印状と比較すると、宛所への敬意が感じられます。

秀忠以降の将軍からも領地安堵の朱印状が発行されました。家宣・家継・慶喜は発行していないため、高麗神社に伝わるのは一二通ですべてです。（写真２）

朱印状は神社の権威を維持するために必要なものでした。特に、家康の朱印状は「権現様の御朱印」として大切にされてきました。

写真２　朱印状 12 通と御朱印箱

しかし、将軍の代替わりには、所有する御朱印を全て江戸まで持参し、原本に忠実な写しを複数提出し、御朱印改奉行の検認を受けるなど、費用負担も大きい手続きが必要でした。

大宮の場合には、三石（米の収穫高に　換算したもので、大半は山林）の領地だけでは神社の維持管理には十分とはいえず、氏子や崇敬者に支えられて、なんとか運営している状況でした。

（横田稔　高麗神社主任学芸員）

神社まめ知識

《神棚に祀るお札について》

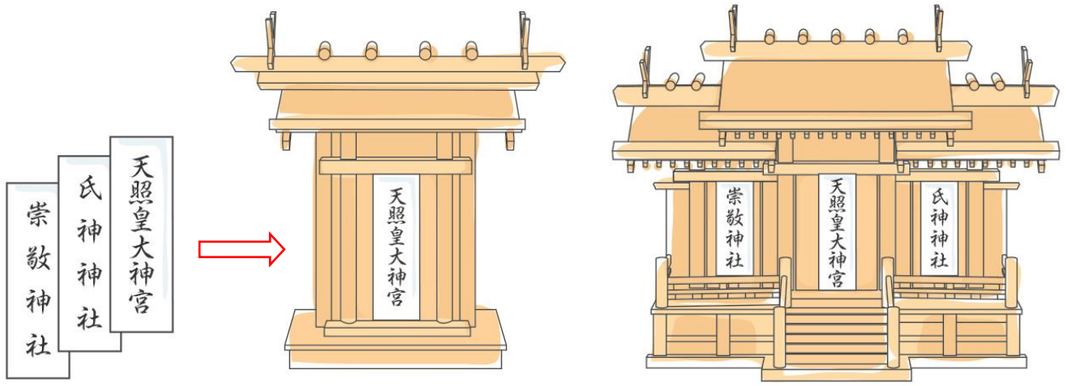
神棚にお祀りするお札は、三つに大別されます。図1のように並べて祀る際には中央に天照皇大神宮と書かれた伊勢神宮のお札「神宮大麻」、向かって右側に氏神様を祀る神社のお札、左側に崇敬する神社のお札を置きます。宮形の扉が一つの物などで、お札を重ねる場合には図2のようにして祀ります。

氏神神社とは、自らが居住する地域にある神社を指し、神社周辺の一定地域の住人を氏子と称します。元来は、文字通り氏姓を同じくする間で、自らの祖神や氏族に縁ある神様を氏神と称して祀ったことに由来します。現在は、もっとも身近な地域一帯の守り神様として、神棚用のお札や祭礼などで受けたお札をお祀りください。

崇敬神社とは、地域外で、個人の特別な信仰等により崇敬される神社を指し、こうした神社を信仰する方を崇敬者と呼びます。他にも遠くへ旅行に行き、その土地の神社へ参拝した際、受けたお札などは、崇敬神社のお札としてお祀りください。

「神宮大麻」は、日本全体を守る天照大御神に通じるお札です。「氏神神社」のお札は、地域を守ってくださる神に通じるお札です。各家々に神々の御神徳が行きわたりますよう、日々祈りを捧げ心の拠り所となる場所を整えて、一年を目安にお祀りください。

近年では、住宅の様式も変わり、多様な外観や内装を取り入れています。そうした流れに呼応するかの様に宮形も家の雰囲気に合うような様々な形となりました。お近くの神主さんのいる神社にご相談ください。



【図2】扉が一つの宮形
左の図のような順で重ねて
宮形へ納めます

【図1】扉が三つ並ぶ宮形

《伊勢神宮のお札「神宮大麻」について》

三重県伊勢市に鎮座する「神宮」は、内宮と呼ばれる「皇大神宮」と、外宮と呼ばれる「豊受大神宮」の二つの正宮を中心に、別宮・摂社・末社・所管社など合わせて一二五社からなるお宮の総称です。神宮は皇室の御祖神と仰ぐ、天照大御神を祀り、特に江戸時代以降は庶民からも崇敬されてきました。十九世紀には、年間の参拝者が五〇〇万人を記録することもあったほどです。これには、神宮と全国の参拝者を繋ぐ「御師」とよばれる人々の活躍がありました。

御師は神宮に奉仕する神職で、全国からの崇敬者を受け入れて、宿泊や神宮の参拝・案内などの世話をしていました。さらに全国におもむいて御祈祷を行い、神宮の御神徳を各地に広めてもいました。御祈祷の後、頒布したものが「御祓大麻」です。この「御祓大麻」の形状は祓い串を箱に入れたもの、あるいは祓い串を剣型のお札で包んだもので、この串に巻き付けている麻こそが「大麻（たいま・おおぬさ）」と言うものでした。麻は古くより神聖なものとされ、神様への捧げものや祓いの道具として今日でも用いられています。これが現在の伊勢神宮のお札「神宮大麻」の起源といわれています。

御師が頒布した「御祓大麻」

明治になると御師の制度が廃止されてしまいますが、「国民が朝夕神宮に敬拝できるように」という明治天皇の思し召しにより、「神宮大麻」として伊勢の神宮より、全国の神社を通じて各家々に頒布されるようになりました。

現在、全国の神社で頒布されている「神宮大麻」

内宮「皇大神宮」

＊コラム＊

《神様との交流の場》

神祭りの場を示す「磐境」という語があります。岩石を人工的に配列し一定の空間を神聖な場とした事が考えられます。これについて神道学者の茂木貞純 氏は、特に「さか」に注目し、次のように解説しています。（簡略）

【磐境の境は「坂合い」とされ、坂と坂の合う所はすなわち境界線となる。その接点は峠であり、物理的に他国への入口であると同時に目に見えない神々の世界への通路とされ、神祭りの場ともなった。】昔から峠や山の頂上、村の境あるいは地平線など何かの境となる所には、別の世界と接する入口があると信じられてきました。

岩石とは異なりますが、棚や台を設け、更には宮形を置くなどして、神威が籠められたお札を祀る。生活環境は様々ですが、たとえ小さくとも自身で定めた神聖な空間を作り、お札を祀ってください。そこが、あなたと神様との交流の場となります。

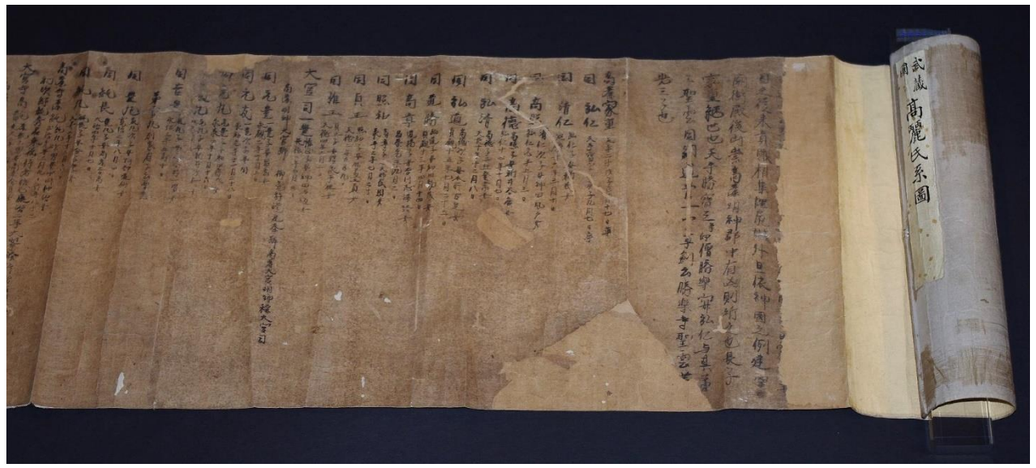
参考図書・「日本語と神道」
著　者・茂木 貞純

高麗氏の足跡
～「武蔵国高麗氏系図」から～

高麗神社宮司　高麗文康

『武蔵国高麗氏系図』は正元元年（一二五九）十一月八日に火災により焼失したが、縁者の家に残された古記録を元に再興され、その後、代々書き綴られてきたという。

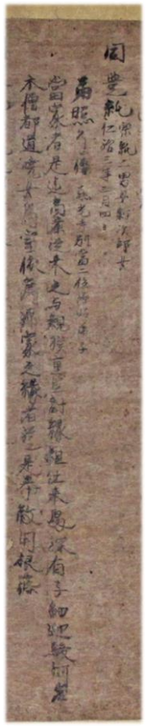
高麗神社の祭神高麗王若光を初代とする高麗氏の系譜では二十七代目に当たる大宮寺豊純の代に次のような記述がある。「当家はこれまで高麗従来の親族重臣と縁組を図り仕え来たりし所、深き子細有りて駿河岩木僧都道暁女を室と為す。源家の縁者と為るに依り是に従い幕紋根篠を用いる」（書き下し筆者　旧字は新字に改めた）これによれば高麗氏は、二十六代（五〇〇年以上）にわたり、高句麗から従ってきた重臣や親族とのみ縁組をしてきたといい、それを「深き子細」により違えて、駿河国岩木の僧侶であった道暁の娘を室としたという。道暁は源家の縁者であるので高麗家も以後源氏の縁者として幕紋であった根篠を用いるようになったという。



武蔵国高麗氏系図（高麗氏所蔵）

二十六代にもわたり守ってきた慣習をあえて違えてまで結んだ縁組で、高麗氏は何を得たのだろう。豊純の三代後の多門房行仙の時、正慶二年（一三三三）五月二十二日鎌倉に仕えていた行仙の弟三郎行持、四郎行勝はいずれも新田義貞の軍勢を迎え撃ち、北条氏の氏寺東勝寺で討ち死にした。豊純の代で行った縁組は、その後の高麗氏を北条氏の御内人まで導き、それは幕府滅亡まで続いたのであった。こうした関係性を見れば、小豪族でもあった高麗氏は、源氏と結びつくことで所領の安堵など家の存続に必要な要素を獲得したのだろう。有力な御家人の間で争いが絶えなかった鎌倉時代にあっては、生き残ることさえ運不運に委ねるほかないように思える。最終的な結果はどうあれ、「その時代」の高麗氏にとっては取りうる最善の選択だったのだろう。

それにしても、高麗氏を源氏と結びつけた道暁とはどんな人物だろう。



右：武蔵国高麗氏系図より
二十七代　大宮寺豊純　記述部

『武蔵国高麗氏系図』にある「駿河岩木」はおそらく「駿河国岩本」の誤記と思われる。そのように考えると、かつての駿河国岩本（現静岡県富士市岩本）にある岩本山実相寺の三代目の院主道暁に行き当たるのだ。この道暁の父は阿野全成と言う。全成の父は源義朝で、異母兄には源頼朝、同母の弟には義経がいた。全成は『平治物語』に「悪禅師」とあだ名されるほどの荒くれものであったらしく、二代将軍頼家によって討たれた。後に道暁の兄である時元は鎌倉殿の後継を巡り北条義時によって討たれた。こうした身の上の道暁は出家して政治向きとは無縁の生活を送ったのだろう。あえて国を隔てた地方の小豪族に娘を嫁がせたのも、道暁からすればその方が、都合が良かったのかもしれない。一方で、高麗家にとっては源氏の縁者となることに家の安定を図る上で、大きな魅力を感じただろう。そのことはおおよそ三代一〇〇年を経ても鎌倉への務めをはたそうとしているところに伺うことができよう。

高麗家の長い歴史の中でも、自ら権力の中心近くに縁を求めようと試みたのはこの時に限られている。それほど権力とは無縁の氏族ではあったが、末端に生きる筆者からすれば、それもまた幸いと思う。

境内さんさく

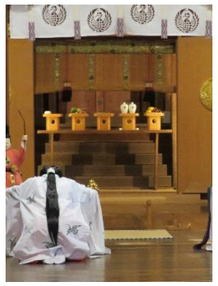
《高麗神社の特別神饌について》

神様がお召し上がりになるお食事や食べ物を「神饌（しんせん）」といいます。高麗神社では毎朝、当番の神主が米・酒・野菜・果物・塩・水の六品を基本とし整え、日供祭（にっくさい）を執り行っております。また、毎月一日と十五日の朝八時に行う月次祭（つきなみさい）では、お米を炊いたものに変えてお供えしています。

神饌は、熟饌（じゅくせん）と生饌（せいせん）とに大別されます。熟饌とは調理神饌ともいい、火を使い調理し、魚などは切り身や干物にするなど、食材を更に美味しくいただけるようにした状態をいいます。一方、火を使わない調理法として、米、鮮魚、野菜、果物など食材をきれいにする事のみで、そのまま盛り付ける形を、生饌あるいは丸物神饌と言います。

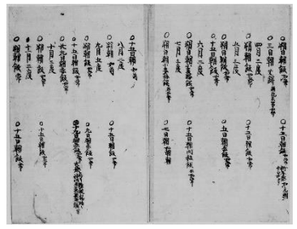
明治時代以降のいつ頃からか熟饌の伝統がほぼ絶えましたが、現宮司は古儀神饌再興に取り組みました。現在、日々の日供祭は、すべて生饌としておりますが、特に例祭や正月、月次祭、節句など特別な日には、一部を熟饌にして捧げております。高麗家五十六代当主 高麗大記（だいき）が残した文献には、今日でもおなじみの草餅や柏餅、旬の食材を調理した物を、決められた月日に供えていたことが記されています。この内容を基に現在は、宮司を始め担当の神主が特別な神饌として調理しております。

『神道祭祀の伝統と祭式』（沼部春友・茂木貞純編著 戎光祥出版 発刊）に神饌の品目選定に関する心得があります。「一社伝来のものがあれば、その伝統を継承することにつとめる」「季節の旬のものを選ぶこと」「土地の産物を優先に選ぶこと」とあります。写真にある草餅は三月三日に供えますが、ヨモギを採取し、餡子作りも小豆を煮て作っております。食材の全てとはいきませんが、手間を掛けたおもてなしをして、神様にお喜びいただけるよう努めております。



10月9日/29日に供える小豆飯（中央）
米に小豆を入れて炊いた物

中央上：正月の芋吸物　宮司が調理し供えている
中央下：7月7日の饅頭　担当職員が餡から手作りしている



高麗大記の文書「高麗大宮社古典神饌帳」明治２年３月 他、「水鏡」安政３年の中にも記述があり、両文書を統合したものが現在の下記表
※表中 小麦粉餅・粒粉餅は調査中の為、【饅頭】に代えて供えている

高麗神社　年間　特別神饌

月	日	時間	内容
正月	元日から６日	朝	芋吸物（雑煮）
	７日	朝	七菜粥
	１４日	夕	繭玉、粟穂（１７日まで）
２月	節分	朝	御飯
３月	３日	朝	草餅
５月	５日	朝	柏餅
６月	朔日	朝	小麦粉餅・粒粉餅【饅頭】
	１５日	朝	小麦粉餅・粒粉餅【饅頭】
７月	朔日	朝	小麦粉餅・粒粉餅【饅頭】
	７日	朝	小麦粉餅・粒粉餅【饅頭】
	１５日	朝	小麦粉餅・粒粉餅【饅頭】
８月	朔日	朝	小麦粉餅・粒粉餅【饅頭】
１０月	９日	朝	小豆飯
	１９日	朝	神酒、赤飯
	２９日	朝	小豆飯
１２月	大晦日	朝	御飯

３月３日の節句に供える草餅（右）
職員が手作りで作っている様子（左）

桜花祭（おうかさい）

高麗神社の大神様と桜の神様 木花咲耶姫に
夜桜会開催を奉告し、日々の御守りに感謝を捧

日　に　ち：令和五年 三月二十六日（日）
祭典開始：午後四時より（約三十分）
祭　　場：高麗神社 前庭（ひがん桜前）

一般の方の参列が可能です。玉串料は必要ありません。
※雨天決行（但し荒天の場合には中止もあります）
雨天時は屋根のある祓所で行います。

よざくらかい 夜桜会

樹齢四百年の銘木 しだれ桜。その花びらが開く頃、幻の茶屋「沖の家」が開店します。幻想的な空間で狭山茶と和菓子をいただきながら、たった一夜の夜桜を心ゆくまで、ご観賞ください。

日　に　ち：令和五年 三月二十六日（日）
開催時間：午後四時三十分～午後七時三十分
（午後七時 茶菓子販売終了／七時三十分ライトアップ終了）

※入場・観賞 無料／雨天決行（荒天時は中止になる事もあります。）
上記時間に幻の茶屋「沖の家」にて茶菓子セットを販売いたします。
境内にて自由に夜桜をご観賞ください。

祈願随時受付　毎日8:30～17:00　（12/31は、14:00まで）
※ご予約の必要はありません。
初宮詣・七五三・ランドセルのお祓い（3月上旬～4月上旬）
人生儀礼各種・商売繁昌・厄除け・方位除け・車お祓い
高麗神社々務所　埼玉県日高市新堀 833　☎042-

編集後記

担当・保々

全国から選ばれ、見事「商工会持続可能モデル賞」を受賞した日高市商工会。過去に危機的状況に陥るも未来の為、取れる最善の策を講じ、更に様々な事業にもチャレンジしてきた。困難な状況というのは、必ずどこかで訪れてくるものです。熟考を重ね、その時出来る限りの力を注ぎ対処する。紙面中、先人達のとった判断と行動がその大切さを教えてくれます。